

「大地のうごめき」表現

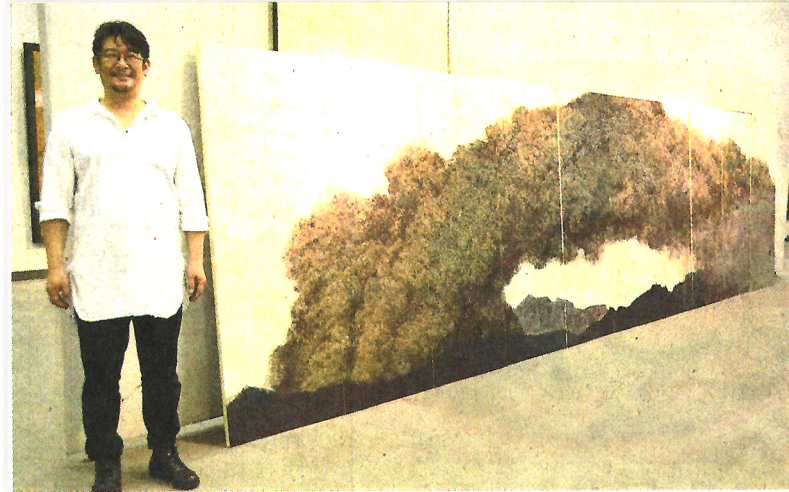
日本画家 中村 賢次さん(54)＝熊本市

近況

横7呎、縦1・8呎の日本画の大作「弦煙」を完成させたばかり。2015年9月の阿蘇中岳の大噴火を描いた。風に流れてアーチ状になった噴煙を重々しく、画面いっぱいに表現している。

噴火の当日と3日後に現場に入り、光景をスケッチした。「黒々とした煙がいつまでも白くならない。風向きが変わったかと思うと、すごく怖かったが、描かずにはいらなかった」と振り返る。

下絵を描かずに、5日間で一気に仕上げた。背景を白にし、山並みを黒く塗りつぶして、噴煙の存在感を際立たせた。現場で強くにおった硫黄を作品に表現しようと、和紙に施した銀箔に水で溶いた硫黄を化学反応させた。薄茶色



横7呎の日本画の大作を完成させた中村賢次さん
＝熊本市中央区

のようになり、黒を基調としながらも複雑な色合いを見せる噴煙になった。

熊本地震で被災し、解体された「森本襖表具材料店」(熊本市)から譲り受けた和紙を使用している。被災した和紙に何を描くのか。熊本地震を挟んで、阿蘇中岳は2度大噴火しており、一連の出来事として受け止めた。「大地がうごめいている。自然の恐怖を忘れないで」とメッセージを込めたという。作品は25、30日、京都市の京都府立文化芸術会館で開かれる展覧会に出品する。

崇城大芸術学部 of 学部長も務める。熊本市中央区の同大ギャラリーでも30日まで個展を開催中だ。

(中原功一朗)